

学校教育目標を実現するための 社会に開かれた教育課程の在り方に関する研究

新学習指導要領における全ての基盤となる考え方である「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、東浦地区、新城地区の小学校、中学校、高等学校と共同で研究を行った。「グランドデザインの策定と周知」「児童生徒の資質・能力を育成するためのカリキュラム・マネジメント」「地域社会との連携・協働」の三つの柱を中心に教育活動に取り組んだことにより、児童生徒の主体性が高まり、資質・能力の育成を中心に据えた授業が展開された。また、育成したい資質・能力を地域社会と共有したことで、地域全体で児童生徒を育てていこうとする機運が高まった。

<検索用キーワード> 社会に開かれた教育課程 カリキュラム・マネジメント
グランドデザイン 資質・能力の育成 地域連携

研究協議会顧問

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授

柴田 好章（令和2, 3, 4年度）

研究協議会委員

東浦町立生路小学校教諭

村田 敬一（令和4年度）

東浦町立生路小学校教諭(現東海市立名和小学校教頭)

那須 稔（令和2, 3年度）

新城市立八名小学校教諭

原田 享明（令和4年度）

新城市立八名小学校教諭

森 千香代（令和2, 3年度）

東浦町立東浦中学校教諭

皆川 峰寛（令和2, 3, 4年度）

新城市立八名中学校教諭

原 正樹（令和2, 3, 4年度）

愛知県立東浦高等学校教諭

金田 卓也（令和3, 4年度）

愛知県立東浦高等学校教諭(現愛知県立東浦高等学校教頭)

玉田 裕（令和2年度）

愛知県立新城有教館高等学校教諭

矢萩 靖子（令和3, 4年度）

愛知県立新城有教館高等学校教諭(現愛知県立豊橋工科高等学校教頭)

岩口 敏也（令和2年度）

総合教育センター経営研究室長(現安城市立里町小学校長)

浅倉 幸代（令和2年度）

総合教育センター教科研究室長

内山 真一（令和3, 4年度）

総合教育センター経営研究室長

佐々 恵（令和4年度）

総合教育センター研究指導主事

成田 隆行（令和2, 3, 4年度）

総合教育センター研究指導主事

磯貝 大輔（令和2, 3, 4年度）

総合教育センター研究指導主事

猪狩 雄一（令和3, 4年度）

総合教育センター研究指導主事

杉浦 伸也（令和3, 4年度）

総合教育センター研究指導主事

太田 恵里（令和3年度）

総合教育センター研究指導主事(現新城市立東郷中学校教諭)

林 栄治（令和2年度）

総合教育センター研究指導主事(現みよし市教育委員会指導主事)

大成 康臣（令和2年度）

総合教育センター研究指導主事

三浦千加子（令和2年度）

総合教育センター研究指導主事

松井 亮（令和2, 3, 4年度主務者）

1 はじめに

新学習指導要領では、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を学校と社会が共有し、社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程」の実現を重視している。この「社会に開かれた教育課程」は、「資質・能力の三つの柱」「カリキュラム・マネジメント」等の新学習指導要領における重要な事項の全ての基盤となる考え方である。

これまでも、学校は各校で定めた教育目標の実現に向けて教育課程を編成し、教育活動を進めてきた。そして、地域社会の特色を生かし、地域と連携した授業実践を行ってきた。そうしたこれまでの取組を踏まえ、新学習指導要領では、教育課程において育成すべき資質・能力を明確にし、社会と共有・連携しながら教育目標を実現していくことを求めている。

そこで、当センターで平成30年度から平成31年度まで行ってきた「カリキュラム・マネジメントの在り方に関する研究」の成果物を活用し、①学校教育目標の社会との共有②子供たちに必要な資質・能力の明確化③地域との連携・協働の三つの観点から「社会に開かれた教育課程」の在り方を考え、「地域とともにある学校」への転換を図っていきたいと考えた。

2 研究の目的

社会とのつながりを踏まえたグランドデザインの策定を通して、これからの時代に求められる資質・能力を育成するための教育課程編成を行い、その目標を社会と共有し、連携・協働によってその実現を目指す。

3 研究の方法

東浦町、新城市の研究協力校（小学校2校、中学校2校、高等学校2校）代表委員と所員による協議を基に進め、以下の三つの観点から検証を行う。

(1) 学校目標の社会との共有

令和2年度は、平成31年度までの先行研究「カリキュラム・マネジメントの在り方に関する研究」における成果物を活用し、全教職員でグランドデザインの策定に取り組んだ。東浦町、新城市の両地区で先行研究に携わっていた研究協力校を拠点として、グランドデザイン策定の流れについて全教職員で共通理解し、協議を進めた。

令和3・4年度は、策定したグランドデザインをどう周知し、教育目標をいかに地域社会と共有していくかということについて取り組んだ。

(2) 子供たちに必要な資質・能力の明確化

令和2年度は、カリキュラム・マネジメントによって教科等横断的なつながりや関連性を可視化したことで、学校の教育活動の特色や教科の内容、資質・能力の関連性について教職員一人一人が自分の役割を考えて協議に参加し、資質・能力の育成をより深く意識した教育活動につなぐことができた。

令和3・4年度は、学校の教育目標を達成するために必要な資質・能力を、各教科・領域で、1単元で、あるいは1時間の授業にどう落とし込み、どう育成していくのかについて考えた。

(3) 地域との連携・協働

令和2年度は、地域と連携した教育実践が、資質・能力の育成という観点において学校の教育活動にどのように位置付けられるのかを見直す取組を行った。「何のための活動か」という視点をもったことで、目的をより明確にして活動に臨むことができた。

令和3・4年度は、学校の教育目標達成のために必要な資質・能力の育成に向けて、地域とどのように目標を共有するか、地域とどのように連携・協働して実践を行っていけばよいのかについて考えた。

4 研究の内容

(1) 学校目標の社会との共有

ア 全教職員で取り組むグランドデザインの策定

(ア) 現状把握シート

学校の強み・弱みを分析し、身に付けさせたい資質・能力を校内で話し合った。東浦中学校では、教育目標を基に子供の強み・弱みを分析し、自校の子供に身に付けさせたい資質・能力を、スライドにある4点に設定した(資料1)。

【資料1 現状把握シート(右:東浦中学校)】

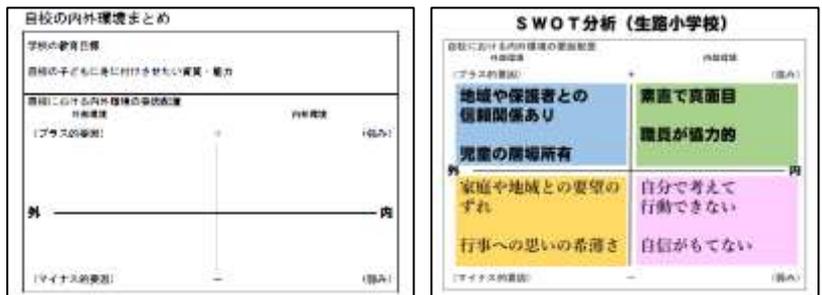


(イ) SWOT分析シート

学校の内外部の環境を分析し、学校がおかれた環境をおさえ、「強み」を上手に利用しつつ、「弱み」をカバーできるように教育活動を見直した。

生路小学校のSWOT分析では、「地域や保護者が協力的である」という事実に対し、信頼関係があると捉える一方で、「家庭や地域との要望のずれ」があると捉えることもできる。こうした分析を基に、「強み」を上手に利用しつつ、「弱み」をカバーできるように教育活動を見直し、共通理解を行った(資料2)。

【資料2 SWOT分析シート(右:生路小学校)】

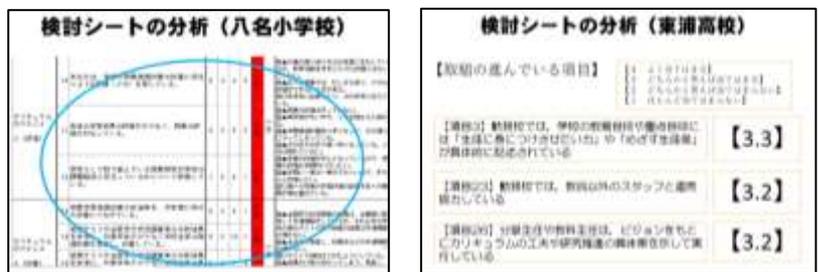


(ウ) カリキュラム・マネジメント検討シート

自校で何ができていて、何ができていないのかを評価・集計し、その結果から教育課題を洗い出した。

八名小学校では、教職員にとつたアンケートを数値化した結果、○で囲まれた課題について話し合い、改善案を絞り込んだ。また、東浦高等学校では、検討用シートを基に、取組の進んでいる項目と、取組に課題の残る項目を分類した(資料3)。

【資料3 カリキュラム・マネジメント検討シートの分析(左:八名小学校 右:東浦高等学校)】



こうして完成したグランドデザインが、4ページ資料4である。グランドデザインを策定したことで、学校として何を大切にしているかを明確に示し、学校の経営ビジョンと課題意識を全教職員で共有することができた。

【資料4 各校のグランドデザイン】



生路小学校



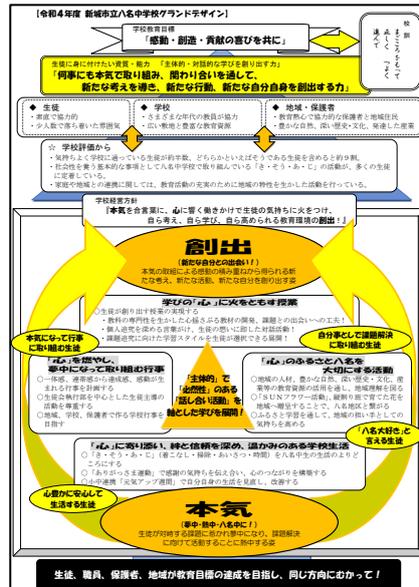
東浦中学校



東浦高等学校



八名小学校



八名中学校



新城有教館高等学校

イ グランドデザインの周知に向けて

(7) グランドデザインの周知

策定したグランドデザインを周知するために、各研究協力校でさまざまな取組がなされた。

学校新聞で説明をしたり、集会等でグランドデザインを手に保護者に説明を行ったりする学校もあった。そんな中、八名中学校は、保護者・地域と目標を共有して生徒を育成していくことが教育目標の実現への近道と考え、保護者・地域・職員で「八名中生を語る会」をオンラインで開催し、生徒の現状について話し合う場を設けた(資料5)。保護者・地域と直接言葉を交

【資料5 「八名中生を語る会」】



わすことで、互いが八名中生に臨む姿がより明確になり、地域全体で生徒を育てていこうという機運が高まった。また、東浦高等学校は、東浦町社会福祉法人、地域スポーツクラブチームの関係者、東浦町地域政策課、近隣住民等と対話をする中で、学校が何を期待されているかを把握し、地域連携を主体とした教育活動につなげた。

(イ) グランドデザインの簡略化

グランドデザインは、そのままでは情報量が多く、保護者や地域の方が読み取るには難しい面があった。また、児童生徒にとっても難解なものが多かった。そこで、グランドデザインの周知という観点から、特に伝えたいことを目立つようにしたり平易な言葉に言い換えたりすることで、内容がより伝わりやすくなるようにする取組が見られた。

生路小学校は、児童が発案した同校のマスコットキャラ

【資料6 簡易版グランドデザイン(左:生路小 右:東浦高)】



ターを中心に据え、校訓、学校重点目標、児童会スローガンなどを周辺に配置し、児童がどのように生活すれば校訓に近づくことができるかを一目で分かるようにした(資料6左)。児童会スローガンは、同校の6年生児童を中心に考えたものである。グランドデザインの周知を図る中で、担任に教育目標について質問をしたり、学校の歴史を調べたりする児童が現れた。グランドデザインを児童が身近に感じたことで、自分たちの目標としての意識を高め、主体的な活動につなげることができた。

東浦高校では、同校情報ビジネスコースの授業である「情報デザイン」の題材として、より周知しやすい簡易版グランドデザインの作成に取り組んだ(資料6右)。重点を置く教育活動のキーワードを東浦町の特産品であるブドウに落とし込み、一つ一つの実が大きく成長するようにとの願いを込めたデザインに仕上げることで、職員と生徒が同じ目標に向かって教育活動を進める意識をもてるようになった。

(2) 子供たちに必要な資質・能力の明確化

ア 育成したい資質・能力の、各教科への落とし込み

学校教育目標を達成するために、東浦中学校や八名中学校では、資質・能力の育成のために必要な力を教科ごとにまとめる動きが見られた(資料7)。また、各教科で資質・能力の育成を中心に据えた授業研究が行われた。研究協力校6校全てにおいて指導案に育成すべき資質・能力が明記され、授業の視点が明確になったことで、授業後の協議では、授業において資質・能力の育成がなされていたかという視点で焦点化した協議を行う様子が見られた。

【資料7 教科で育成したい力(東浦中)】

○社会(杉中)

テーマ	思考を深めるための発問と意見を伝え合う活動の工夫
目指す生徒像	習得した知識をもとに、自分の考えをもち、相手の意見と比較することで、自らの思考を深めることができる生徒
具体的抓手立て	A 単元全体を通じた取組 ①立場に分かれて考える活動を設定する。 ②対話する活動を設定する。 ③単元の最後に協議判断する活動を設定する。 B 始めについて ①本時のねらいを設定する。 ②単元全体を貫くねらいを設定する。 ③生徒同士で基礎知識を確認する場を設定する。 C 発問の工夫について ①資料を見せて、生徒同士で対話できるような発問を設定する。 ②資料を見せて、多様なオープン発問を設定する。

新城有教館高校は、研究授業後の協議で使用する授業講評用紙をリニューアルした（資料8）。授業を批評するというよりも、「教育目標を実現するため、考えられる授業展開を提案し合う」というねらいの下で作成された。評価の視点として、身に付けさせたい三つの資質・能力を表の下部に書き加え、参観者は、この三つの力の育成を意識して、授業者に提案ができるようにした。

イ 育成したい資質・能力の基礎となる力を付ける取組

八名小学校では、話し合う力の育成を目指した「八名っ子トーク」という各学級での話し合い活動の改善に取り組んだ。朝の会の後半にテーマに沿って提案者が発表を行い、それについてみんなで話し合うものであるが、活動の中でさまざまな反省点が上がってきていたため、テーマ選定やトークの進め方、座席の位置などの4点について改善を行った。

資料9は、研究授業における教師と児童の発言回数の比である。教師の発問に対して、児童の発言の多いことが分かる。授業中の発言に見られる「〇〇さんに質問です」「〇〇さんの意見と似ていて」「〇〇はどういうことですか」「どうして〇〇と考えるのですか」などの話型は、毎朝の八名っ子トークの中で培われたものである。日々の積み重ねが授業改善を支えていると考えられる。

(3) 地域との連携・協働

これまでも地域と連携・協働した実践は各校で行われていたが、資質・能力の育成という視点から、それまでの活動が見直され、新たな取組が生まれた。

八名中学校の「SUNフラワー活動」は、20年以上前から学年の垣根を越えて協力して花を育てることで、心を成長させ、地域に花を広げることを目的として実施されてきた。しかし、年々目的意識が低下し、生徒の「本気」「創出」の姿とは程遠いものとなっていた。生徒会執行部にその現状を投げかけると、保護者や地域の方と鉢花をつくり、独り暮らしのお年寄りに贈り、八名中の花を地域に広げたいという意見が出された。花の苗は、新城有教館高校の園芸デザイン系列の教職員、生徒に鉢植えのこつを説明・指導していただき、

生徒は班の仲間、保護者、地域の方と協力して、寄せ植えを完成させた（資料10）。その後、縦割り班で花を育て、夏休み前に民生委員の協力を得て、独り暮らしのお年寄りにフラワーギフトとしてプレゼントした。伝統的な行事の目的を改めて明確にしたことで、異校種との連携にもつなげた好例である。

生路小は、東浦ふるさとガイドの方と連携して地域学習を行った。地域の歴史的建造物についての説明を聞くだけでなく、一緒に回りながら、地域の方の思いや願いを知るとともに、今後このような施設を維持・管理、発展させていくために、どうしていくとよいのかについて話し合う授業を行った。

実践は、社会科と総合的な学習の時間を横断したカリキュラムで行われた。二つの教科を横断的に取り扱うことで、通常よりも多く調べたりまとめたりする時間を確保できたので、児童は、テーマについ

【資料8 授業講評用紙(新城有教館高)】

授業見学・講評シート KPT+		記入者()
年 月 日 曜日	限	科目名()
学年・クラス/選択時()		授業者()
Keep 一層続けていってほしい /真似したい 良いところ	Problem 一回見えた課題 気になったところ	
十生徒の様子で気が付いたこと	Try 一今後挑戦してほしいこと 別の授業展開の提案	
※生徒の「気づく力」・「向き合う力」・「伝える力」を伸ばす手立て いいアイデアがあれば「Try」に記入を!		

【資料9 教師の発問と児童の発言回数の比率】

6年生国語科「風切るつばさ」……教師1：児童7
 4年生国語科「走れ」……………教師1：児童6
 3年生国語科『『ほけんだより』を読みくらべよう』
 ……………教師1：児童2

【資料10 SUNフラワー活動】



てよりいっそう考えを深めることができた。実践の前には、担当教師がどのように授業を進めていくのかについて、ふるさとガイドの方と数回にわたり折衝を行った。以前は、ガイドの方に任せる部分が大きかったが、地域学習を学ぶことの意義やねらいを共有することによって、ねらいに沿った授業を展開することができた(資料11)。

【資料11 授業の様子】



5 研究のまとめと今後の課題

(1) 学校教育目標の社会との共有

簡易版グランドデザインを通して、「こんな学校にしたい」という教職員の思いを児童生徒が共有したことで、児童会によるスローガン作成や、生徒による簡易版グランドデザインの制作など子供主体の活動が生まれた。また、地域や保護者への周知を通して教育目標を共有したことで、地域との新たなつながりが生まれ、地域の願いを受け止めた実践が行われた。

(2) 子供たちに必要な資質・能力の明確化

学校教育目標に基づくカリキュラム・マネジメントを通して、各学校において、教育目標を実現するための育成したい資質・能力を明確にし、子供に主体的な学びを提供しようとする教師の教育活動の改善をもたらした。

(3) 地域との連携・協働

資質・能力の育成を念頭に置いた授業改善に取り組んだことで、地域との連携・協働においても、これまでの教育活動の見直しがなされた。また、教育目標を地域と共有したことで、地域の「学校の力になりたい」という思いを引き出し、活動に新たな価値を与えた。

(4) 今後の課題

本研究は、グランドデザインの策定やカリキュラム・マネジメント、教育活動の見直しなど、教職員が同一歩調で取り組んでこそ進んでいく部分が多い。しかし、「地域とともにある学校」の実現には、その学校についての校内での共通理解、地域との相互理解が不可欠である。今後は、持続可能でより効果的に教育活動を展開していくための手法について研究を進めたい。

6 おわりに

「社会に開かれた教育課程」は、教職員が学校にどんな課題があるのかを把握し、どんな学校にしていきたいのかという将来像を思い描き、地域社会がそれを受け入れることによって動き始める。そのためには、さまざまな教育活動を学校教育目標に照らし合わせて価値付け、児童生徒のどんな資質・能力を育成したいのかということを常に問い続けることが大切である。また、今回の研究では三つの観点(資料12)を設定して実践に取り組んだが、三つのうちのどこから手を付けていくかということについては、学校の実態を踏まえた戦略が必要になってくる。

本研究に際し3年間協力をいただいた6校の代表委員と、研究協力校の校長先生はじめ全教職員の方々、そして御指導いただいた名古屋大学大学院 柴田好章教授に心から感謝申し上げます。

【資料12 「社会に開かれた教育課程」研究イメージ】

